

伝書鳩

創刊 第1号

井上靖記念文化財団

目次

詩「残照」	井上靖・二
財団の会報第一回について	井上ふみ・四
新聞社に鳩がいたころ	高野昭・六
井上文学と私	峰岸成次・一〇
井上靖の研究者として	藤沢全・一二
第一回井上靖文化賞授賞者決定	・・・・一四
今年開館した記念館の紹介	浦城幾世・一六
井上靖記念文化財団について	井上修一・一九
全国の井上靖文学碑の一覧	黒田佳子・二二
詩「挽歌」	井上靖・四八



詩

残照

井上靖

一日の終りに夕暮がやって来るよ
うに、——と、そんな思いが俺を
捉えた。落日の残照で真赤に燃え
た土屋の集落を通過した時だった。
一日の終りに夕暮がやって来るよ

うに、俺の生涯にもいま夕暮が来
ようとしている。無人の路地で驢
馬が燃え、無人の十字路で駱駝が
燃えている。くるまは再び沙漠へ
はいつてゆく。沙漠もまた赤く燃
えている。

詩集「遠征路」所収

財団の発刊にあたって

井上ふみ

靖が逝きましてやがて三年になろうとしております。以来皆様の一方なりませぬご厚意をいただいております。井上靖記念文化財団も、漸くささやかながら会報

第1号を出せる運びになりました。

十一月には文化賞も発表することが出来ました。選考委員の先生方が、慎重かつご熱心にお選びくださっ

て、第一回授賞者は音楽の小澤征爾さんとなりました。

昨秋から、毎日新聞社と駒場の日本近代文学館の後援によります井上靖文学展も、東京をはじめ各地で開催されまして、入場者の数は大阪を筆頭に十四万人を越えたと聞いております。

個人様もいろいろご出品くださって、私が初めて拝見するものもございました。宅から出しましたものにも、このようなものがあつたかしらなど、よくもたくさん原稿を書いたものだ、ひとごとのように今更敬服や驚きの目でわが夫を見直しております。

創造美術の先生方が大作をご出品くださいましたことは、感謝して余りあるものでございます。

井上靖記念文化財団はこれからでございます。これから続けてゆかなければなりません。文化賞も選考委

員の先生方のご助力によって、次々に出ることになってまいしょう。会報もお父さんに負けずに努力して出そうと一同が張り切っております。それぞれが部署を預かって頑張っております。

仏になつてしまった靖も、いずれは財団をと心づもりは持っておりますので、ささやかであっても確とした財団になっていきますことを願って、天上から暖かな光を当ててくれると思います。

会報が出版できますに当り、財団がますます確固たるものになりますことを祈りつつ私のご挨拶いたします。

（井上靖記念文化財団理事長）

新聞社に鳩がいたころ

高野 昭

私が新聞社に入った昭和二十六年には、まだ新聞社で鳩を飼っていた。原稿や写真を運ぶ伝書鳩である。回線が少なくて長距離電話はなかなか掛からず、電送写真も普及していなかった当時、鳩便は大事な通信手段だった。

どこの新聞社の屋上にも大きな鳩舎があり、昼間、運動のために放された鳩の群れが、いつもビルの上空で円を描いていた。それは、いかにも新聞社らしい風景だった。

新人教育が終わって配属された地方の支局にも鳩がいた。初めての宿直明けの朝、私を起こして

くれたのは、目ざまし時計のベルではなく、鳩舎で空腹を訴える鳩の鳴き声だった。そしてアルバイト高校生の給仕君が鳩に餌をやることから、いつものような支局の一日が始まった。

しかし、その後まもなく私のいた新聞社では、鳩便を前面的に廃止してしまった。さすがに時代遅れになっていたのだろう。だから残念なことに、私は一度も自分の原稿を伝書鳩で送ったことはない。廃止がもう少し遅かったら、私は鳩を使っていたことがある新聞記者の最後の一人になっていたかもしれないのだが。

井上先生が昭和二十六年に発表した「断雲」は、

新聞社の鳩が登場し、鳩便で原稿を送る様子が詳しく描かれている珍しい作品である。無心に空を飛ぶ小さな生きものが、この小説の蔭の主人公だ。

鳥といえば井上先生には「海峡」という作品がある。日本で最初にバードウォッチングをテーマにして、昭和三十二年に書かれた長編である。

この小説は、北国から渡ってきたアカエリヒレアシシギが、後樂園球場のライトに迷いこんで、ナイターを中断させるところから始まり、いくつもの探鳥紀行が季節感ゆたかに書きこまれていて、それだけでも鳥好きを堪能させる。だが、もっと魅力的なのは、鳥に心を奪われた人間が生き生きと描かれていることだろう。

私自身、鳥が好きな人間だがなぜ鳥に執着するのかという問いにはとても答えにくい。どんなに考えても、どこかにうそが入るか、もの足りない

ものが残ってしまうからである。

この小説でも一つの答が出されているわけではないが、井上先生は鳥が好きな人間の心の中を正確に、しかし暖かくみつめている。先生の作品のなかで最も好きな作品といわれれば、私はためらわず「海峡」を挙げるだろう。

「海峡」のほかにも、鳥が点景として巧みに描かれ、効果を上げている作品は少なくない。井上先生がナチュラリストだったとは決して思えないのに不思議である。「断雲」でも伝書鳩は「戦争に少しも傷められない美しいもの」として登場する。

よく知られているように、先生は昭和十一年に大阪の毎日新聞社に入り、退社するまでの十五年間をほとんど学芸部で過ごしたが、戦争が激しくなると学芸部がなくなると、社会部に移った。

「断雲」は、このころの記者活動の体験から生ま

れたようだ。

敗戦前夜の昭和二十年夏、社会部記者の多木は、赤穂の塩田を視察する大蔵大臣を取材するため、カメラマンのほかに鳩係りの芳さんも連れて大阪から出張する。

会見を終えた多木は、「塩田の蔵相」という短い記事を書き、それを小さなパラフィン紙に細かい字で写して、同じ原稿を三通つくり、鳩の背中に背負わせる円筒に詰める。「フランスの口紅のように洒落た荷物」である。

芳さんは、さらに写真のフィルムを詰めた一本を加え、それぞれを四羽に背負せると、一羽ずつ鳩の頭をなで、「しっかり飛べよ」といいながら、空に投げるように放してやる。放された鳩はいかにも必死な様子で、空高く舞い上がってゆく。

あいにく天候は悪く、しかも、このあたりには鷹が多い。芳さんによると、どうやら三羽は東へ

向かったが、一羽だけは雲に入ったきり、どこへ行ったかわからないという。だから芳さんは「あの雲、あの雲」といって、天を仰いだまま、身じろぎもせず立ちつくしている。

しかし鳩たちの働きで原稿が明日の朝刊に間合っても読者はだれも、この記事が鳩によって運ばれたことに気づかないだろう。新聞には往々にしてそんなことがある。

伝書鳩の歴史は古く、ギリシャ・ローマ時代にさかのぼるといわれる。そんなにも古い、鳥の帰巣本能が頼りだけの原始的な通信方法が、つい四十年ほど前まで新聞社で使われていたとは、信じられない気がするほどだ。

そして、その四十年ほどの間に新聞づくりの技術は驚くほど変わってしまった。現代の新聞社では鳩はもちろん、鉛筆もザラ紙の原稿用紙も、活字さえも使わないという。

けれども私には鳩がいたころの新聞社がなつかしい。新聞づくりは古風だったが人間的だったし、先輩達にも個性的な記者が多かったと思う。だが、それも私の感傷にすぎないのだろう。

八十歳の誕生日を迎えた井上先生は、これから書きたいテーマの一つとして、先生が体験した「終戦前後の新聞社時代」を挙げられた。人生の一つの区切りを迎えて、ご自分の文学の出発点である新聞社時代を、振りかえろうとされたのだろう。

実際、先生の初期の作品には新聞社の影が濃い。「闘牛」「あすなる物語」「暗い潮」などの主役ばかりでなく、傍役、端役として、さらに狂言回し、語り手として、新聞記者が登場する作品はいくつもある。晩年の先生もまた、伝書鳩がいたころの新聞社を、なつかしく思い出しておられたのかも知れない。

（日本文芸家協会書記局長）

ちょっとした思い出

花とクシヤミ

黒田佳子

朝の父親と言えば、遅い目覚めと大きなクシヤミ。二、三回で止まるのだけれど、旅先の宿などでは、廊下の先まで響いていました。そして、幾分鼻をつまらせた不機嫌な顔。今になって考えてみると、父はアレルギー体質だったのでしょう。世田谷の応接間を通り抜けるとき、「ここで、何故だかクシヤミが」と言っていた所には、いつも母の心尽くしの花が活けられていたり、贈り物の花束が飾られたりしていました。そう、今日さわがれている花粉症だったのですね。そう言えば、初期の作品に「貧血と花と爆弾」という題の作品がありました。あの内容は？こんど読んでみましょう。

井上文学と私

峰岸成次

私の井上文学との出会いは映画の作品からであった。昭和三十六、三十七、三十八年頃、闘牛の町である宇和島の谷本書店に勤めていた頃、時間があるとよく映画を見に行った。「獵銃」「河口」「渦」「春の海図」「霧子の運命」「憂愁平野」「潮の光」「しろばんば」等であった。これらの映画から感じたことは他の映画に見られない爽やかさがあり、よくわからないけれども私が求めていたものはこのような清烈な作品群だったことに気付く、「井上文学」という山脈を登り始めたのである。中でも「しろばんば」は映画でも小説で

も、その情景や人情は私の子供の頃の南伊予の山村とそれほど変わらず、まるで私も子供達の一人になってしろばんばの舞う白い街道を駆けているかのような不思議な思いにさせられてしまうのである。

私は仕事を変わり宇和島にいたが、やがて転勤となって大阪に出て来た。今から二十七年も前のことになる。昭和四十七年十月より新潮社より小説全集三十二冊が毎月一冊ずつ出ることになりそれを機に井上文学に関する「本」を集めることを決心した。この全集は愛蔵本も同時に発行さ

れたが私には手が届かなかった。

私は小説の中では現代小説が好きである。長編では「海峡」「満ちてくる潮」「氷壁」「あした来る人」「樺の木」等である。これらの作品を読み進むうちに私も知らぬ間に旅をしたり、詩人になったり、湖や川や樹や空を見ている不思議な想いにいつもさせられてしまうのである。また短編でも、天上の星のようにキラッと光り、心に深く残る作品がある。特に好きなのは「雷雨」「ボタン」「大洗の月」「早春の墓参」「伊那の白梅」「川の話」「北の駅路」等々である。これらの作品は何度読み返しても何か発見があるように思うのである。私はこれまで、心のおとろえた時など、これらの短編を読み返すと濁った水が時間と共に澄み切って行くように心も平常になっていくのである。

これらの作品を井上先生は四十代で書かれてい

るが、本当に驚くばかりだ。一編、一編の作品をじっくり読むと人生とはこんなものではないでしょうか。とそれとなく教えられてしまうのである。また詩集も九冊出されていますがその中で、「井上靖ノート」を出された故坂入公一氏に書かれた詩「愛する人に」一編を声を出して読むと、何かしら、励まされてしまう。「洪水のように、大きく、烈しく、生きなくてもいい。清水のように、あの岩蔭の、人目につかぬ滴りのように、清らかに、ひそやかに、自ら耀いて、生きてもらいたい。」私は時折声を出して読んでみるが、その度、勇氣のようなものを覚える。

私の場合、詩集九冊、小説全集三十二冊は「論語」と言えそうである。うれしい時、悲しい時、この論語を開くと私なりの希望が持てるから不思議である。

（愛読者、私設井上靖の図書室を企画中）

寄稿

井上靖の研究者として

藤沢 全

私のライフワークは井上靖研究です。目下、勤務先の研究年報に連載していたのをもとに、大幅に新稿を加えて一書を準備中です。書名は『井上靖研究―家系より芥川賞受賞まで―』で、四百字詰原稿用紙で約千二百枚。日本大学の学術論文出版助成金により晩秋の頃までに三省堂から出版いたします。

これは本格的な伝記を意図しておりますが、何しろ生涯と芸術の全体が圧倒的なボリュームがあるものですから、戦後文壇への登場までといたしました。とりわけ誕生前史をへ家系Ⅴとへ才能Ⅴの

由来の面から詳細化しましたので、その自伝的作品系列の把握にそなえ、靖像の定立の基礎をなすものと考えております。

私がこの作家に関心を持つようになったのは、旭川生まれの靖が昭和三十八年六月に佐藤春夫夫妻を伴い、北海道の新十津川町（昨年NHKで放映の「新十津川物語」の舞台）を訪れたニュースを故郷からの便りで知り、望郷の中で井上文学をむさぼるように読んだことに始まります。一読者から研究者への転機は、学燈社発行の月刊専門誌「国文学」から『しろばんば』論の依頼があった

時でした。拙稿は同誌の昭和五十年三月号に掲載されましたが、この時の調査研究が伝記の取り組みの端緒となりました。

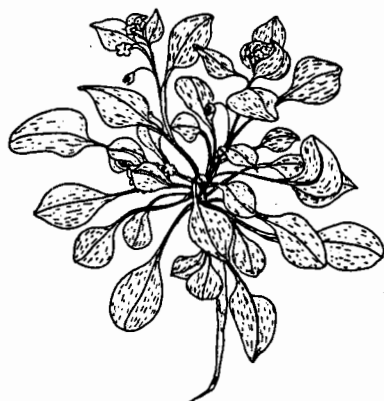
ストーリーは読者の感想を抱いて完結するとしたら、井上文学の読者の分担も軽いはずはありません。むしろ研究者は重要な使命をになっていますので、こうした問題意識で眺めますと靖の世界は格別です。形姿と心理と人間意識の独自性に加え、方法上の卓抜さによるものと思われませんが、このような文学者はきわめて稀ですので、二十世紀の文学史にどのように位置づけていくべきか、それが私どもの命題となります。アメリカ・ドイツ・フランス・中国をはじめ世界各国で受容され、すでにくつつかの国で本格的な靖論が書かれており、心強いかがりです。

個人的な好みで言えば、未完ですが『わだつみ』は日本人海外移民の運命を描いていて印象的です。

『わが母の記』もいいですね。老いを描いて美を表面化したユニバーサルなテーマは、これからますます生彩を放っていくと思います。

やがて来る四回忌には、その墓前に拙著を捧げたいと思っています。

(日本大学教授)



第一回

井上靖文化賞授賞者決定

音楽指揮者

小沢征爾氏に

推薦理由

日本の文化を世界に、世界の文化を日本に交流させるのみならず、言語、民族、国境を超え、音楽を通して文化から文化へ民族から民族へと広く世界で活動しているその業績を高く評価し、推薦の理由としている。

井上靖文化賞とは、文学者、井上靖を記念して設立

された賞であるが、生前井上靖は常々、文学賞の数はもう充分にある、との意見を持ち、人にも語っていた意をくみ、文学から視点を変え、広く文学をも含めた文化の賞を設定したものである。

井上靖は明治の生まれ。生き方は骨の髄まで日本人と言えたようであるが、しかし残された作品や生前の

活動は様々の分野にわたり、広く世界に目をむけて、社会に多くの影響をあたえて来たものであった。その業績を記念して「井上靖文化賞」が作られ、ここに小沢征爾氏が第一回の授賞者として誕生したのである。

候補として数多くの名前が挙げられた中で選考に選考が重ねられた結果、最終選考が、東京千代田区の山の上ホテルで行われた。委員の熱心な討議は、二時間と制限時間ギリギリ一杯。なんと言っても第一回め。これからの賞の性格や方向を踏まえての論議も含んでいたのか、室外に待つ人にも熱気が伝わって来るような一時であった。

決定すると直ぐに待機していた報道陣に発表の予定しかしその前に授賞者に諾否の返事を貰わねば、と小澤氏に連絡を求めると、現在ウイーンでウイーンフィルハーモニーのリハーサル真っ最中で呼び出せません、との返事。とにかくメモを書いてもらい、舞台

の小澤氏にみせ、承諾の返事を得てから発表の記者会見にこぎつけた。

選考委員は大江健三郎、大岡信、司馬遼太郎、樋口隆康、平山郁夫、の諸氏。通常このような場合には事務の代表者が事務的に発表して終わることの多いなか、大江氏の発案で全員揃っての会見となり、更に各氏、一言ずつ推薦理由を述べるなど、心のこもる授賞発表風景となった。(司馬氏は氏自身の突然の叙勲で多忙のため、今回は欠席。)

~~~~~  
受賞者略歴 小澤征爾 昭和一〇年生まれ。ボストン交響楽団音楽監督、新日本フィル主席指揮者、水戸室内管弦楽団常任指揮者。音楽関係の受賞多数。日本芸術院賞、国際交流基金賞、他。

~~~~~  
~~~~~



# 今年開館した記念館の紹介

浦城幾世

一月二十九日の三回忌には、各方面の皆さまから沢山のお花を頂戴して、仏壇のまわりは、とても明るく、はなやかでした。伊豆湯が島の山の上のお墓には、友の会をはじめ約七十名もの方々がお参りしてくださり、改めて皆さまの父に対するお気持ちをうれしく有難く思いました。

平成四年九月三日、東京日本橋高島屋会場からはじまった「井上靖展」（毎日新聞創刊百二十年記念、日本近代文学館創立三十周年記念）は、本年二月十五日、父が中学時代を過ごした沼津の西

武百貨店会場を最後に終了いたしました。東京、大阪、横浜、米子、神戸、旭川、柏、沼津と全国八ヶ所の会場で開かれました。

今年度は、高月町の「井上靖記念室」、旭川の「井上靖記念館」、米子の「井上靖記念館・アジア博物館」が開館しました。それぞれの記念館について、簡単に紹介したいと思います。

四月二十九日に、滋賀県高月町の「出会いの森の図書館」の二階に「井上靖記念室」がオープンいたしました。

小説「星と祭」や、随筆「美しきものとの出会

い」などに書かれている渡岸寺の十一面観音をはじめとする湖北の観音さまたちに、父は心をひかれていました。昭和四十七年頃からこの国宝の十一面観音さまをはじめ、秘仏として、永年村人たちによって守られつづけて来た観音さまを、秘仏ではなく、一般の人々に開放するようにこの地を訪れては講演したりして説いていました。この図書館は、ふるさと創生事業により町のシンボルとして建てられたものであり、この二階に記念室が作られました。父の生前からの計画で、出来上がるのを楽しみにしており、文学碑の碑文もお渡ししてありました。碑は船越保武先生の彫像「茉莉花の像」と共に図書館の前庭に建立されました。

作品「星と祭」に関する品々や、十一面観音に関する随筆類、靖と高月町の交流を中心とした展示と書斎を模したコーナーが作られました。図書館は十一面観音の町にちなんで、建物の屋根は十

一の斜面で出来ています。町民のどうせ作るなら良いものをという気持ちが始まりとあって作られたと聞いています。周囲の庭作りをはじめ、とってもあたたかな感じのするよい記念室が出来ました。

七月二十四日に、北海道旭川市の「井上靖記念館」がオープンいたしました。

父の出生地である旭川の旧陸軍第七師団の将校の社交場であった偕行社の建物の隣に設立されました。

偕行社は、国の重要文化財で来春、彫刻美術館として開館します。本年九月に開館した「歴史文化資料館」と共に井上靖記念館は旭川市の文化になう拠点となるそうです。旭川は靖の父隼雄の軍人としての勤務地でした。父にとっては出生したというだけのところに記念館を設立するにはむずかしい面も多少ありましたが、関係者のご努力によって旭川と井上靖を結ぶパイプも徐々に出来

てまいりました。

「ナナカマドの赤い実の洋燈」と旭川のことを詠んだ碑にちなんで、「ナナカマドの会」という名の文学を愛好する人々の交流の会も結成されました。いつか書こうとしていたらしく北海道や旭川に関する資料も集められておりました。また、「井上靖通り」と名づけられた立派な通りも作られました。旭川市とのご縁をこれからも大切にして、井上靖記念館と井上靖記念文化財団との交流をしっかりともっていかなければならないと思っています。

九月二十二日には、米子市に「井上靖記念館・アジア博物館」が開館しました。米子空港から、車で五分ほどのところですが。この記念館は、父が生前柔道関係で知合いになった方が作られたものです。

この記念館は世田谷に現在あります井上家の一部Ⅱ応接間、書斎、玄関、書庫、居間Ⅱを模したものと展示室から成っています。

作品「北の海」および柔道関係の品々や、作品「蒼き狼」に関するもの、鳥取県ゆかりの作品の紹介などを中心にして展示されています。展示に加えて、井上家の建物の雰囲気を見ていただくということですが。敷地内の隣の館には、世界的な宝として有名なペルシャ錦のアナビアン・コレクションが展示されています。

他の記念館には見られないユニークなものになるのではないのでしょうか。

(井上靖長女)

# 財団法人 井上靖記念文化財団について

井上修一

本財団は父井上靖の死後、小西甚右衛門、故小田切進の両氏をはじめとする多くの方々の絶大なるご指導・御協力によりまして、平成四年三月十三日に文化庁より認可を得て設立されました。本財団の憲法、つまり寄付行為によりますと、概要は次のようになっています。

目的 井上靖の業績と遺志を永く後世に伝えるため、井上靖を記念する賞を設定し、文学・美術・歴史等の分野において優れた業績を挙げたものを顕彰するとともに、海外において日本文化の研究を行う者を援助することなどにより、文化の発展に寄与することを目的とする。

事業

- (1) 井上靖を記念する文化賞の設定及び授与
- (2) 海外における日本文化の研究者又は研究団体に対する援助

- (3) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開
- (4) 日本近代文学に関する資料の収集及び調査の研究

- (5) 日本近代文学に関する講演会の開催

- (6) その他目的を達成するために必要な事業事業の個々について補足いたします。

(1) に関しましては、一ツ橋綜合財団より財政・事務両面の御協力を得まして、すでに第一回「井上靖文化賞」をポストン交響楽団監督の小澤征爾氏にさしあげることが決まっております。目下、来春一

月に予定される第一回の授賞記念パーティに向けて、準備を進めているところであります。念のため、この賞の概略も、次に掲げさせていただきます。

**対象** 文学・美術・歴史等の広い分野における創造的な芸術活動や卓抜した学術の成果、ならびに多年にわたる実践や地道な研究で、今後の一層の活躍が期待されるもの。

**贈賞** 顕彰は年一回とし、原則として複数贈賞は行わない。賞状および賞金百万円を贈る。平成五年度より毎年十一月に選考発表、翌年一月に贈賞する。

**選考** 文学・美術・歴史等の各界における専門家および作家・評論家・ジャーナリストなど多数の方から贈賞対象の推薦を広く求め、理事長の委嘱する選考委員会で決定する。選考委員の任期は三年とし、留任を妨げない。

**選考委員**

大江健三郎、大岡信、司馬遼太郎、樋口隆康、

平山郁夫（五十音順・敬称略）

事業の（２）は主として経済的に恵まれない国々への助成事業です。中でも中国をはじめとするアジア諸国の日本文化研究者・研究団体にささやかながらでも援助することができたらと考えています。

事業の（３）、（４）、（５）に関しましては、多くの方々の御協力によりまして、すでにさまざまな企画の実現に参画して参りました。その主なものをもの挙げてみますと、つぎようになります。

平成四年度

・北上市の日本詩歌文学館における「井上靖展（詩の世界）」（５月２４日～６月２８日）

・日本近代文学館・毎日新聞社主催による全国各地の「井上靖展（文学の軌跡と美の世界）」

（前年９月３日～２月１５日）

・奈良県文化開館における奈良県主催の講演会

「井上靖（その魅力と足跡）」（９月２７日）

・天城湯ヶ島町農村環境改善センターにおける天城湯ヶ島主催の講演会「追悼・井上靖」

(1月29日・31日)

平成五年度

・滋賀県高月町立図書館内の井上靖記念室の開設

(4月29日)

・旭川市立井上靖記念館の設立ならびに友の会の

「ナナカマドの会」発表(7月24日)

今後この分野の仕事は着々と進められる予定です

す。また将来的には各地にある井上靖に関する諸機

関に働きかけ、機関同士で情報を交換し、協力関係

のネットワークを作っていくことを考えています

その折にはまた多くの皆様方のお知恵を拝借し、

お力添えをお願いすることになろうかと存じます

どうぞよろしく御協力下さいますよう、この誌面を

借りてお願い申し上げます

なお、最後になりましたが、本財団の理事・評議

員の方々をご紹介し、日頃のご指導・御尽力に対し  
衷心よりの感謝の念を申し上げます

役員

理事長

井上ふみ

常務理事

井上修一

理事

大岡信、相賀徹夫、上林吾郎、小

西甚右衛門、佐藤亮一、司馬遼太

郎、高崎芳郎、徳間康快、服部敏

幸、平山郁夫、三木啓史、横地治

男、

評議員

井上卓也、浦城幾世、大越幸夫、

尾崎秀樹、角川春樹、黒田佳子、

嶋中鵬二、高野昭、高原須美子、

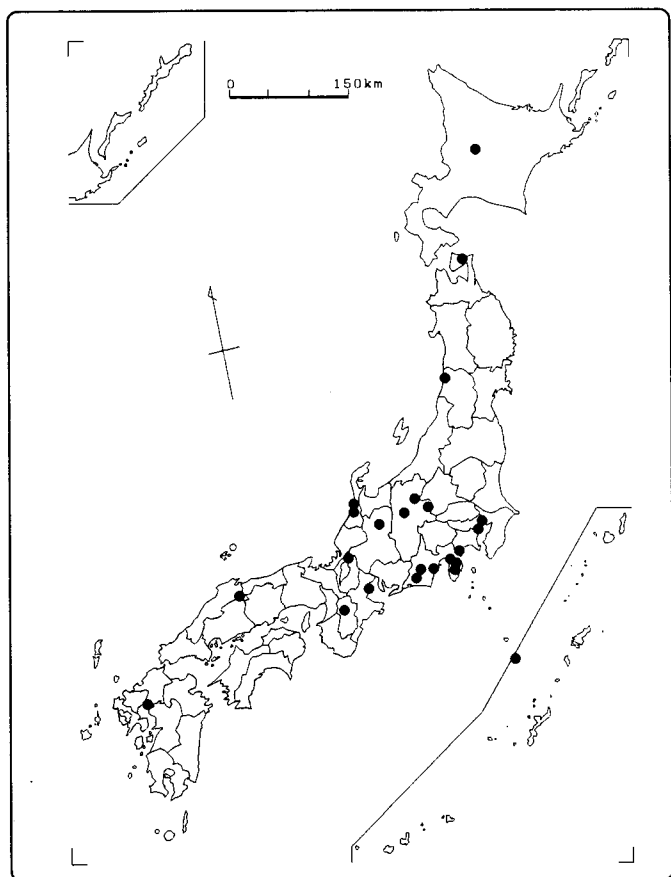
仲木都富、緑川亨

(五十音順・敬称略)

(井上靖長男、筑波大学教授)

こんなに沢山ありました

## 全国の井上靖文学碑の一覧



## 一、沼津駅前石碑

若し原子力より大きい力を持つものがあるとすれば、それは愛だ。愛の力以外にはない。

井上靖

井上靖は沼津で中学時代を過ごしている。小説「夏草冬濤」の舞台の地。

## 二、沼津千本浜公園の碑

千個の海のかげらが、千本の松の間に挟まっていた。少年の日、私は毎日それを一つずつ食べて育った。

一、所在地 静岡県沼津市、沼

津駅前 建立 昭和三十三年八月

設立者・管理 日本赤十字奉仕

団 設計 和田金剛、下山昇

素材 黒御影石

二、所在地 静岡県沼津市千本

郷林、千本浜公園内 建立 昭和

和三十八年三月 改装 平成四

年三月 設立者 岡野喜一郎、

斉藤了英、他 管理 沼津市教

育委員会 設計 菊竹清訓

素材 コンクリート、御影石



### 三、宝蔵院の記念碑

宝暦の頃、国事に勤むる男女この寺へ逃れしが捕吏の襲うところとなりて、当時の住職と共に討たれしという哀史伝われり。寺鐘の失われしはその頃のことにして、爾来堂宇荒廃のまま時移り、世は変り、今日まで鐘楼建つことなし。昭和の住職関谷宣雄師、鐘楼再建を発願して、多歳浄財を得て、昭和三十八年春、和光の鐘樓の建立を見る。住古迦賦色迦王惡龍の請に依って伽藍を建て、鐘を打ってその瞋心を息むという。諸々の惡龍の瞋心ここに息むべし、時恰も新中川放水路開鑿に当り、宝蔵院はその流れの岸に臨めり。晨夕の鐘声は水底に没せし農家、耕地のために、また新しい供養の意味を持つと謂うべし。

井上靖

いわれは「宝蔵院昔話拔書帖」関谷宣雄編に書かれている。

### 四、観音院の由布姫の墓

小説「風林火山」の作中人物、由布姫にちなんで建てられた墓碑。碑文の

三、所在地 東京都葛飾区奥戸

八丁目

建立 昭和三十八年一月三日

設立者・管理 宝蔵院

四、所在地 長野県岡谷市湊四

の一五の二二、竜光山小坂、観

音院 建立 昭和三十八年十一月

中に「井上靖先生の風林火山に著されており」という言葉がはいっている。

## 五、熊野山墓地慰霊碑

魂魄飛びてここ美しき故里へかえる

この村の戦没者を供養して、地元の同世代の人々が建てた碑。熊野山墓地には井上家代々の墓もあり、井上靖もこの山に眠っている。

## 六、修善寺工業高校の碑

山河 美しければ ころろ 美し 井上靖

## 七、世界貿易センタービルの定礎石

定礎

菊

二四日

五、所在地 静岡県田方郡天城

湯ケ島町湯ケ島熊野山

建立 昭和三十九年三月

設立者 宿郷友会

素材 自然石

六、所在地 静岡県田方郡修善

寺町 建立 昭和四〇年十一月

設立者 創立三〇周年記念実行

委員会 管理 修善寺工業高校

素材 天城山自然石（玄武岩）

七、所在地 東京都港区浜松町

二一四一、世界貿易センター

ビルディング 建立 昭和四四

年十一月 設立者（株）東京

詩集「運河」に収録の「菊」は定礎式を書いている。

## 八、静岡西武百貨店前の碑

もし少年が身を投ずるにふさわしい集団があるとすれば、それは鹿の群れであろう。その優美清純な姿態。聡明にして夢みる眼眸、そしてなによりも谷を越え、川を渡り、山野を駆けける細くして強靱な脚。ああ、日本の少年たちよ、鹿たちよ。

井上靖

## 九、明日香村の道標

いわれみち

井上靖書

磐余道

井上靖書

いわれ、とは香具山から今の桜井市を示す古地名。近鉄、桜井駅から県立桜井商高、石村山、文殊院、山田寺あたりから明日香に向かう道の間の分岐点の二ヶ所に井上靖書の道しるべがある。

ターミナル

八、所在地 〓 静岡県静岡市紺屋

町六―七 建立 〓 昭和四五年六

月 設立者 〓 西武百貨店、堤清

二 管理 〓 静岡西武百貨店 〓

〓 〓 ブロンズ像、御影石 彫刻

〓 佐藤忠良

開店記念に。

九、所在地 〓 奈良県桜井市

設立者・管理 〓 桜井市

建立 〓 昭和四七年

一〇、駿河平の井上文学館の碑

思うどち 遊び惚けぬ そのかみの 香貫 我入道 みなとまち 夏は夏  
草 冬は冬濤 井上靖

一一、佐藤春夫の碑

仙祿湖畔 井上靖書

佐藤春夫（春の日の会）の会員の一人として、書く。仙祿湖とは佐藤春夫が命名した池の名。

一二、内灘の碑

日本海美し 内灘の砂丘美し 波の音聞きて 生きる人の心美し 井上靖

一〇、所在地 静岡県駿東郡駿

河平 建立 昭和四八年一月

設立 駿河銀行 岡野喜一郎

管理 井上文学館 設計 菊竹

清訓 素材 御影石

一一、所在地 長野県佐久市岩

村田西本町 建立 昭和四九年

五月一三日 設立者 佐久三田

会、ほか、春の日の会

一二、所在地 石川県河北郡内

灘町宮坂運動公園内 建立 昭

和五〇年三月 設立者 内灘町

町長、中村小重、他 管理 内

ある壮大なものが傾いていた、と海を歌った詩人があった。その言い方を借りれば、波打際はある壮大なるものの重い裳だ。海は一枚の大きな紺の布だと歌った詩人もある。さしずめ波打際は、それを縁どる白いレースということになる。しかし、私が一番好きなのは、雪が降ると海は大きなインキ壺になる、と歌った詩人だ。分厚く白い瑛瑯質の容器の中に青い海があるだけだ。大きく青い日本海。もうどこにも波打際は無い。

副碑―長い方の詩―は詩集「運河」所収の「海」

### 二三、福栄小学校の記念碑

學舎百年 井上靖書

福栄村（現在は神福）は戦時中、井上一家が疎開していた。長女もこの小学校に短期間だが通っていた。

灘町役場 設計 北陸造形

図 手取川上流自然石

一三、所在地 鳥取県日南町、

福栄小学校 建立 昭和五〇年

設立者 創立百周年記念事業推

進委員会 管理 福栄小学校

一四、昭和の森標示の碑

昭和の森 天城山自然休養林

井上靖

天城営林署管轄地の標示

一五、鳥取県日南町の碑

ここ中国山脈の稜線 天体の植民地 風雨順時 五穀豊穡 夜毎の星蘭干  
たり 四季を問わず涼々たる秀気渡る ああ ここ中国山脈の稜線 天体  
の植民地  
昭和五三年五月一日 井上靖

小説「通夜の客」の舞台の福栄村がよく見渡せる太田峠に建てられている  
碑。

昭和六〇年三月この碑のそばに井上靖の記念館が建てられた。

平成元年一〇月二〇日、名誉町民になる。

一四、所在地 静岡県田方郡天

城湯ヶ島町 建立 昭和五二年

三月 設立・管理 東京営林局

天城営林署

一五、所在地 鳥取県日野市日

南町神福四五の二 建立 昭和

五三年八月二六日 設立者 元

日南町長、高橋篤史 管理 日

南町役場 設計 日下組 素材

白御影石

## 一六、昭和の森会館の碑

元日の教室で、先生は黒板に、「新しい年」と書いた。確かに新しい年であった。先生の顔も新しくったし、生徒たちの顔も新しくった。教室の窓から見える青い空も、明るい陽の散っている校庭も、校庭の水溜りに張っている氷も、眼に映るものみな新しくった。校門も、その向こうの街道も、街道を歩いている村の大人たちも、みな、新しくった。それ以後、再び新しい年はやって来ない。幼い日の教室の記憶が、年毎に遠く、小さくゴッホの初期のパステル画のように鮮烈になってゆくだけだ。

詩集「遠征路」所収「新しい年」

昭和の森会館の中に井上靖の展示コーナーあり。

## 一七、湯ヶ島小学校の碑

地球上で一番清らかな広場。北に向って整列すると、遠くに富士が見え

一六、所在地 静岡県田方郡天

城湯ヶ島町昭和の森会館 建立

昭和五五年七月 設立者 元

湯ヶ島町町長下山小重 管理

昭和の森会館 設計 ノバ工芸

一七、所在地 静岡県田方郡天

城湯ヶ島町 建立 昭和五六年

三月三日 設立者 湯ヶ島小学

る。廻れ右すると天城が見える。富士は父、天城は母。父と母が見ている校庭でボールを投げる。誰よりも高く、美しく、真直ぐに、天まで届けと、ボールを投げる。

井上靖

井上靖の通った学校。しかし、当時とは場所が違っている。同じ校庭に井上の親戚で、やはりここで学んだ井上靖の岳父、足立文太郎の碑もある。昭和四六年四月一日建立、有志が設立、撰文は井上靖。足立は短編小説「比良のシャクナゲ」、「雷雨」のモデルともいわれている。

## 一八、滑沢溪谷の碑

なぜかその中年男は村人の颯爽をかい、彼に集まる不評判は子供の私の耳にさえも入っていた。ある冬の朝、私は、その人がかたく腰帶をしめ、コートテンの上衣の上に猟銃を重くくいませ、長靴で霜柱を踏みしだきながら、天城への間道の叢をゆっくりと分け登ってゆくのを見たことがあった。それから二十余年、その人はとうに故人になったが、その時のその人のうしろ姿は今でも私の臉から消えない。生きものの命断つ白い鋼鉄の器

校PTA **管理** 湯ヶ島小学校

**設計** 堀井造園 **素材** 狩野川

産自然石

一八、所在地 静岡県田方郡天

城湯ヶ島町湯ヶ島滑沢溪谷 **起**

**立** 昭和五七年三月 **管理** 湯

ヶ島町役場 **素材** コンクリー

ト、御影石



具で、あのように冷たく武装しなければならなかったものは何であったのか。私は今でも都会の雑踏の中にある時、ふと、あの獵人のように歩きたいと思うことがある。ゆっくりと、静かに、冷たく。そして、人生の白い河床をのぞき見た中年の孤独なる精神と肉体の双方に、同時にしみ入るような重量感を捺印するものは、やはりあの磨き光れる一個の獵銃をおいてはないかと思うのだ。

井上靖

「獵銃」、詩集「北国」所収

## 一九、渡岸寺の碑

慈眼 秋風 湖北の寺 井上靖書

琵琶湖周辺の十一面觀音信仰にひかれて小説「星と祭」を書いている。また、高月町は、長期間の秘仏として誰も見ることの出来なかった觀音群を公開して、多くの人が拝めるように、村の人に説いた縁のある町。

一九、**所在地** 滋賀県伊香郡高

月町大字渡岸寺 **建立** 昭和五

七年一〇月 **設立者** 高月町国

宝維持奉賛会 **管理** 渡岸寺

**素材** 揖斐川産自然石

## 二〇、硫黄島の鎮魂碑

悲しい海、悲しい空、今日も真青く澄んでいます。あなた方の悲しい死によって、あなた方の悲しい死をとおして、私たちは今、漸くにして一つの考えを持つことができるようになりました。もう自分ひとりの幸福を求める時代は終わった。ほかの人が幸福でなくて、どうして自分が幸福になれるだろう。——もう自分だけの平和を求める時代は終わった。ほかの国が平和でなくて、どうして自分の国が平和であり得よう。あなた方の悲しい死に対して、私たちは今、こうした私たちの考えを捧げたいと思います。そして今はただ祈るばかりです。御霊、とこしなえに安かれと。

井上靖

## 二一、松本亀次郎先生顕彰の碑

中国人留学生教育に生涯を捧げた人 井上靖書

周恩来、魯迅、郭沫若等の先生であり、様々に日中友好に尽くした人。

二〇、**所在地** 〓 東京都小笠原村

硫黄島字南一番 **建立** 〓 昭和五

八年九月九日 **設立者** 〓 東京都

知事、鈴木俊一 **設計** 〓 相田武

文設計研究所 **設計** 〓 黒御影石

戦没者の霊を弔う。

二一、**所在地** 〓 静岡県掛川市大

東町松本亀次郎誕生の地 **建立**

〓 昭和六〇年三月三〇日 **設立**

**省・管理** 〓 掛川市

## 二三、酒田市日和山公園

風が海から吹きつけているので、ひどく寒かった。丘陵には松が多く、松の幹の海と反対側の面にだけ雪が白くくつついている。二人は丘陵の上を斜めにつつ切つて、日枝神社の境内へとはいって行つた。公園にも人の姿は見えなかったが、土地の人が山王さんと呼ぶこの神社の境内にも、人の姿は見えなかった。境内にはいると地面には雪が積っていた。

小説「氷壁」の主人公、魚津が遭難した小坂の実家を訪ねて酒田市に行つた部分。

## 二三、箱根八里記念碑

北斗闌干

井上靖

箱根街道に沿って開いた歩道コースに建てられている。昔から道行く人の道しるべであった北斗星が燦然と輝く様をあらわす言葉。

二三、所在地 山形県酒田市、

日和山公園内 **建立** 昭和六〇

年四月二〇日 **設立者** 酒田市

教育委員会

二三、所在地 神奈川県箱根、

西坂茨平 **建立** 昭和六〇年

**設立・管理** 三島市青年会議所

## 二四、石川近代文学館横の碑

高等学校の学生の頃、日本海の砂丘の上で、ひとりマントに身を包み、仰向けに横たわって、星の流れるのを見たことがある。十一月の凍った星座から、一条の青光をひらめかし、忽然とかき消えたその星の孤独な所行ほど、強く私の青春の魂をゆり動かしたものはなかった。それから半世紀、命あって、若き日と同じように、十一月の日本海の砂丘の上に横たわって、長く尾を曳いて疾走する星を見る。併し心打たれるのは、その孤独な所行ではなく、ひとり恒星群から脱落し、天体を落下する星というものの終焉のみごとき、そのおどろくべき清潔さであった。

詩集「北国」所収「流星」を基にして。

井上靖の卒業した四高校舎が文学館に使われている縁で、四高開学百年祭開催の記念として建てた碑。小説「北の海」の舞台。文学館内に井上靖の展示室あり。

## 二五、沼津市民文化センターの碑

二四、所在地 石川県金沢市広

坂二二五、中央公園内

昭和六一年一〇月 設立者

井上靖文学碑建設委員会 管

石川近代文学館 設計 船

越保武 素材 黒御影石

二五、所在地 静岡県沼津市御

思うどち 遊び惚けぬ そのかみの 香貫 我入道 みなとまち 夏は夏  
草 冬は冬瀟 井上靖

“ふるさと”という言葉は好きだ。古里、故里、故郷、そして、故園、郷  
関、——故園は軽やかで、颯々と風が渡り、郷関は重く、憂愁の薄暮が垂  
れこめているが、どちらもいい。しかし、私の最も好きなのは、論語にあ  
る、“父母国”という呼び方で、わが日本に於ても、これに勝るものはな  
さそうだ。ふるさととはまことに、“ちちははの国”なのである。ああ、ふ  
るさとの山河よ、ちちははの国の雲よ、風よ、陽よ。 井上靖

「思うどち」で始まる碑は三か所にある。駿河平の井上文学館、沼津市  
妙覚寺、文化センターに同じ詩がある。

「ふるさと」は鳥取県日南町にも類似の詩がある。詩集「遠征路」に所収。

## 二六、天龍川河川敷の碑

幸町一五一、市民文化センタ  
ー前、（建物内にも1つ）  
昭和六三年七月 設  
陵同窓会 管理 市民文化セン  
ター 黒御影石

二六、所在地 静岡県磐田郡佐

北斗と織姫の間に横たわっている星座は、天龍と名付けられている。長く、美しい星の帯。あるところは烈しく、あるところは静かに輝いている。その空高く竝んだ星たちが、己が出生の地を、大和島根に求めんとすると、列島のほぼ中央、天龍溪谷ということになるうか。諏訪湖と遠州灘を結ぶ烈しく、美しい水の帯。あるところは激み、あるところは急湍をなし、時に流れは身を翻し、龍となって、天を窺っている。

井上靖

「天龍川・讃」、詩集「星関干」所収

佐久間市は「川」をテーマに町造りを進める所から「川の話」等の作品を持つ井上靖の碑を建立。小説「満ちてくる潮」の舞台にもなっている。

## 二七、沼津東高校の碑

潮が満ちて来るような、そんな満たし方で、人は己が生涯を何ものかで満たしてきた。

井上靖

久間町中部上島地内、天龍川河

川敷 **建立** 昭和三三年一〇月

**設立者** 佐久間町町長小原侃之

輔 **管理** 佐久間町役場 **設計**

船越保武 **素材** 黒花崗岩

二七、**所在地** 静岡県沼津市岡

の宮八一二沼津東高校 **建立**

平成元年四月六日 **設計** 香陵

同窓会 **設計** 沼津石材 **素材**

庵治石

沼津東高は旧制の沼津中学にあたり、香陵同窓会はその二つを合わせた卒業生の会。井上靖は沼津中学時代を小説「夏草冬濤」に書いている。

## 二八、青森県風間浦村の碑

暫くすると、再び海峡の闇の中に、アカエリヒレアシギの集団は、その啼き声と一緒に吸い込まれ始めた。小さい生命が四、五十、ひと固まりになって、一定の間隔を置いて、次々に、海峡の闇の中に突入し、突入している。私たちは生涯で、そう度々、立ち合おうとは思われぬ、可憐な生きものの、凄烈極まりない渡海の式典に列していた。風間浦村の荒磯に立つたまま、寒さも忘れ、一言も発しないで、耳を澄ませていた。ひどく高く感じられる天の一角、そこだけに幾つかの小さい星が輝いていた。井上靖

詩集「星蘭干」所収「アカエリヒレアシギ」

小説「海峡」の舞台になっている村。村制施行百周年記念事業の一つとしてこの碑が建てられる。

二八、所在地 青森県下北郡風

間浦村大字下風呂、下風呂漁港

公園建立 平成元年九月三〇日

設立者 風間浦村長、小野愼一

管理 風間浦村役場 設計 船

越保武 素材 黒花崗岩

## 二九、飛驒民族村文学散歩道の碑

人間が造った 古い歴史と文化の町を、自然が造った 大山脈、小山脈が取り巻いている。冬になると 山脈という山脈は雪に覆われ、町は隅々まで、飛驒の貌を持ち、優しい人情に鑲められる。日本列島のほぼ中央に位置し、フンザ、ギルギットと竝ぶ 世界の山の町・高山。登山家の背の美しく見える、静かな山の町・高山。

井上靖

詩集「星蘭干」所収「飛驒高山・讃」

## 三〇、旭川信用金庫前の碑

私は十七歳の、この町で生まれ、いま、百歳の、この町を歩く。すべては大きく変ったが、ただ一つ、変らぬものありとすれば、それは、雪をかぶったナナカマドの、あの赤い実の洋燈。一步、一步、その汚れなき光に、足許を照らされて行く。現実と夢幻が、このように、ぴったりと、調和した例を知らない。ああ、北の王都・旭川の、常に天を望む、凜乎たる詩精

二九、所在地 〓 岐阜県高山市、

西之一色町、飛驒民族村文学散歩道 建立 〓 平成二年五月 設

立者 〓 社団法人、高山市文化協会

管理 〓 高山市市民文化会館

内、文化協会（高山市昭和町一

一八八） 設計 〓 撫石園 船

越保武 素材 〓 ジャバーク

三〇、所在地 〓 北海道旭川市四

条緑橋通り八丁目、旭川信用金

庫前 建立 〓 平成二年九月 設

立者 〓 旭川信用金庫理事長、松

田忠男 管理 〓 旭川信用金庫

素材 〓 黒御影石 設計 〓 中井延

也（旭川シンボルトワ―の製作



神。それを縁どる、雪をかぶったナナカマドの、あの赤い実の洋燈。

井上靖

井上靖は旭川で生まれている。

### 三二、新高輪プリンスホテルの碑

“世界の屋根”パミールの中心都邑である喀什（カシュガル）の一夜、そこに仰ぐ北辰（北極星）は美しい。凜々と鳴っている。“北辰、その所に居て、衆星、これを共る。”「論語」に収められている孔子の詞が想い出されて来る。――北辰が居るべき所に居る限り、それを中心にして、もろもろの星は、大きく、それを廻って、運行する。肉眼で捉えることはできないが、宇宙の現象で、これほど美しいものが、他にあらうとは思われぬ。こうした喀什に別れを告げ、“世界の屋根”パミールから降りて、東を指すと、崑崙山脈・北麓の大回廊の中に入って行く。往古の歴史の本舞台・“西域南道”、――そのかみの兵どもの夢の跡である。晝は崑崙の裾に次々に現われてくる羊群と、天幕都市を縫って行き、夜になると、北辰を仰ぎつつ、月光を踏んで、ひたすら東へ。日本を、東京を目指して行く。二十

者)

三二、所在地 東京都港区高輪

三―三―、新高輪プリンス

ホテル国際館パミール内

平成二年九月 設立者・管理

新高輪プリンスホテル

井上靖（題、「北辰」）

ホテルの「国際館パミール」および大宴

会場「崑崙」、「北辰」の名を付けた時に寄せたときの文章。

### 三二、鑑真和上嘉瀬津上陸記念の碑

鑑真和上は、日本を目指す苦難にみちた放浪五年の旅の途上、失明されている。日本の土を踏まれてから朝に夕に、和上の盲いた二つの御眼には、何が映っていたであろうか。旅の途上、相継いで他界した和上の高弟・祥彦の姿も、日本僧衆の姿もあったであろうし、和上がその半生を埋められた古都、揚州の風光も絶えず、その臉を訪れていたに違いない。併し、私は思う。鑑真和上の場合、その盲いた臉に繁く載せておられたものは、やはり、まだ見ぬ日本ではなかったか。法のために、命をかけて、漸くにして、果し得た日本との大文化交流である。大小の行事こそ華やかに行われておれ、その度にまだ見ぬ日本の山野が、日本の都が、日本の民が、どうして臉に載らないでいようか。」「若葉しておん眼の雫ぬぐはばや」

三二、**所在地** 佐賀県佐賀市嘉

瀬町佐賀県立森林公園内

**建立**

平成二年一月 **設立** 鑑真

和上顕彰会、会長 福岡日出麿

**説明** 御影石 **管理** 佐賀県

晩年の和上のお姿を写したと伝えられる鑑真和上座像（国宝）の、どこか悲しそうなお眼のあたりを、日本の若葉でぬぐって差上げたいというのが、この有名な句の作者、芭蕉の心であったのである。私も亦、この句の心を借りて、毎年五月には、奈良に唐招提寺を訪ね、鑑真和上像の前に立たせて頂くことを念願としている。

一九九〇年一〇月 井上靖（題、「若葉して」 鑑真和上座像・讃）

鑑真和上が日本に来る迄の話をテーマにした小説「天平の薨」の縁で碑文を書く。石川近代文学館では、毎年、井上靖の誕生の五月に、井上靖が寄贈した鑑真和上像を祭り、「若葉して」の碑文に因み、鑑真まつり、「若葉の五月の詩人祭」という行事を行っている。

### 三三、沼津市妙覚寺の碑

思うどち、遊び惚けぬ そのかみの 香貫 我入道 港町 夏は夏草  
冬は冬瀟 井上靖。

三三、所在地 静岡県沼津市下

河原町、妙覚寺内 建立 平成

三年四月 設立者・管理 妙覚

寺住職、横山政道 素材 黒御

影石 設計 杉山匡孝設計事務

ここちよき 衣のしめりよ 露ふかき 灯ともし頃の 町をゆきけり

―井上靖、沼中五年―

私は沼津中学時代、三学年に進級した大正十三年（一九二四年）四月から、下河原町の妙覚寺に下宿させて貰った。正確な言い方をすれば、預って貰ったのである。そして翌十四年四月に沼津中学校の寄宿舎に入るまで、十七歳の春から十八歳にかけて、妙覚寺を根拠地として、なんと自由に、少年らしい明暮を持たせて貰ったことか。妙覚寺には、たいへんお世話になった。と言って、お世話になったのは、私ひとりではない。私を取り巻いている友人全部と言わなければならぬ。藤井寿雄、岐部豪治、露木豊、金井廣らの面々で、いずれも、少年詩人でもあり、少年歌人でもあった。詩を書いたり、歌を作ったり、香貫山を歩き廻ったり、千本浜で泳いだりした。この間の消息は小説「夏草冬濤」に詳しい。それから、いつか、茫々六十余年、藤井、岐部、露木の三君は故人になっているが、金井、井上はまだ健在で、顔を合わせる度に、遠い妙覚寺時代を偲び、自分たちはあのすばらしい青春の泉から出発したと、そうした思いを深くして

所

いる。平成二年六月 井上靖 註。碑面に刻んだ少年たちの短歌、詩は、いずれも当時の沼津中学校の校友会誌に掲載されている。

### 三四、白子港の大黒屋光太夫の碑

ここ、新装なった鈴鹿市白子港は、十八世紀末、神昌丸船頭、大黒屋光太夫が、容易ならぬ運命を荷って、東洋史の重要な一ページの中に入って行った、その難多き航海に於ける乗船、出航の地である。日本とロシアを、江戸とレニングラードを、鈴鹿とイルクーツクを、異国に於ける光太夫・十年の歳月は結んだが、その数々の悲劇を鏤めた異国日誌の大きな展開は、ここ白子浦を起点とし、終点としてゐる。そうした光太夫を船頭とする神昌丸出航の日も、白子浦は今日となく一つ変りなく、蒼穹の下に、美しく波立ち、騒ぐ、白い波濤の絨毯を大きく拡げていたであろうか。

井上靖

(題、大黒屋光太夫・讃)

小説「おろしや國酔夢譚」の主人公、光太夫出帆の碑

三四、所在地 三重県鈴鹿市白子、白子港緑地 建立 平成四年四月一日 設立者 鈴鹿市教育委員会 管理 鈴鹿市役所 資料 アフリカ産黒御影石 設 三村力(地元の高校の先生) 碑の傍らのモニメントも。

### 三五、鳥取県日南町の井上靖記念館の碑

“ふるさと”という言葉は好きだ。古里、故里、故郷、どれもいい。外国でも“ふるさと”という言葉は例外なく美しいと聞いている。そう言えば、ドイツ語のハイマートなどは、何となくドイツ的なものをいっばい着けている言葉のような気がする。漢字の辞典の援けを借りると、故園、故丘、故山、故里、郷邑、郷関、郷園、郷井、郷陌、郷閭、郷里、たくさん出てくる。故園は軽やかで・・・（中略）・・・ああ、ふるさとの山河よ、ちちははの国の雲よ、風よ。

（題、ふるさと）（文末の「陽よ」はない）

この詩は沼津市民文化センターの碑文と基本的にはおなじ詩であるが、部分的に違うところがあるので、そちらを参照。井上ふみの筆になっている。

日南町建設業協会（沢田賢治会長 一三社）が創立三〇周年記念事業で建立し、町に寄贈したもの。傍らに井上靖記念館「野分の館」、井上靖直筆の碑がある。他に井上靖の碑一つある。

三五、所在地 鳥取県日野市日

南町神福、文学碑公園（通称井

上靖公園）内 建立 平成四年

五月一九日 設立者 日南町建

設業協会 管理 日南町 設計

船越保武

## 三六、高月町立図書館前の碑

有名な渡岸寺の十一面観音像を初めとして、沢山の衆生済渡の仏さまたちが、静かに立たれたり、お坐りになったりしている古い町。琵琶湖を隔てて、遠く比良山系を望める美しい町、高月。平成の新しい時代を迎えてからのある日、その明るい広場、町の聖地に、一つの事件が起った。この町を象徴する花とされている茉莉花の精が、どこからともなく現われ、美しい裸婦像となって、広場のまん中に、すっくりと立たれた。平成の、新しい観音像と申し上げたい。凜とした、近代的なお姿である。世界的規模を持つ瞑想の町、信仰の聖地、湖畔散策の町としての、新しい時代の、新しい高月は、この日、このようにして生まれた。

井上靖

(題、「聖韻」)

町立図書館の中に井上靖記念室がある。船越保武の彫刻と井上の碑が新しい図書館開館とともに建てられた。この碑の後ろに井上ふみによる、小さい碑もあり。高月町は小説「星と祭」にも出てくる十一面観音の町。

三六、**所在地** 滋賀県伊香郡高月町渡岸寺出会いの森公園、町立図書館前 **建立** 平成五年四月二十九日 **設立者・管理** 高月町

## 三七、上山田町の碑

潮が満ちて来るようなそんな充たし方で、私は私の人生を何ものかで充たしたい。

井上靖

短編小説「姥捨」にこの地方のことを書いている。その取材旅行の時（昭和三〇年ごろ）井上靖が土地の人に渡していた文を今日碑文として使ったもの。沼津東高校の碑文と類似であるが、書いた年代の差が明確に出ているのでそちらと参照のこと。

開湯百周年の行事の一つとして建立。

★この一覧表は、平成三年に石川近代文学館が作成した表をもとに、補充・追加して新たに作成したのですが、お気付きの点は、おしらせ下さい。平成五年十月作成。（作成者…黒田佳子）

★静岡県三島市に三島ライオンズクラブ創立三十周年記念事業の一つとしても一つ碑設立の計画があます。

三七、所在地 長野県更級郡上

山田町温泉中央公園内 建立

平成五年七月一八日 設置者

上山田町長 山崎尚夫





# 挽歌

井上靖

あなたが亡くなってから五日目に、  
庭のくぬぎの最後の葉を落とした風  
が吹きました。あなたが亡くなって  
から一カ月目に、小さな地震があり  
ました。あなたが亡くなってから三  
十九日目に雪が降りました。その翌  
日も夜になって、また雪が落ちまし  
た。そしてその翌日は静かな冬の陽  
が一日中照り渡り、夕方には珍しい  
ほど赤い落日がありました。庭に敷



編集後記

井上靖は、生涯の大半を昭和に生き、その昭和の前半に新聞記者として記事を書きながら、小説家としての基礎を築いていった作家。作品や業績の研究や整理はまだこれから、と言うところのようですが、現実に残された作品の数の多さとその広さ、深さには、誰をも圧倒させるものがあります。この井上靖を記念して作られた財団からの広報紙第一号として、「伝書鳩」が出版されるのですが、今の所、編集部員は、唯一人。ささやかな、手作り広報紙になりましたが、そのうち仲間も作りながら、楽しいものにするつもりです。記事を書いては鳩に運ばせた等、まだのんびりした習慣が残っていた、井上靖の新聞記者時代を記念して、名前の由来にいたしました。

黒田 佳子

鳩のカット

福井欧夏氏の作。題名にちなんで、ちょっと鳩のスケッチを、と気楽にお願いしたところ、いくらなんでも五分、十分では無理ですよ、との返事。一ヶ月程していただいたのは、今にも飛び出しそうな本物の鳩の絵。鳩など想像ではとても描けないからと上野公園に三日、四日通って、観察したり写真を撮ったりと大変な苦勞の作品。鳩を捕まえる訳にもいかないしと。言われてみれば、なるほどなと思いました。大切に使用させていただきます。

ありがとうございました

井上靖没後、多くの方々から、井上靖の生前の生原稿を御寄贈頂き有り難うございました。これらの原稿は井上靖文学館に寄贈保管させていただくことになりました。ここに厚く御礼申し上げます。

伝書鳩

創刊号 一九九三年二月発行

編集者

黒田佳子

発行

横浜市緑区新石川三一八一九  
井上靖記念文化財団